

タイトル	創世神話の系譜：古代メソポタミアの資料から(2)
著者	桑原，俊一
引用	北海学園大学人文論集，36：63-83
発行日	2007-03-31

創世神話の系譜

— 古代メソポタミアの資料から (2) —

桑原俊一

キーワード：宇宙観，創世神話，一神教，古代メソポタミア

4.4. 創造と世界秩序

神々が誕生し、パンテオンが形成される。メソポタミアの場合、都市国家の成立にともない、神は都市神の性格を担う。主要な神々についていえば、天空神アン/アヌ¹はウルクの都市神であった²。後に最高神の地位につくエンリルはニップルの都市神であったし、常に人間に好意的な水神エンキ/エアはエリドゥの都市神である。しかし、これらの神と都市の関係は歴史的に固定化されるものではなく、セム人がメソポタミアを広く支配する時代になると一都市に複数の神々が祭祀されるようになる。多数の神々の誕生は都市国家の拡張にともない神々の序列化と世界秩序の確立を促した。

メソポタミアの神話においては、神々が世界を支配し、すべては神々のためであり、人間の介在する余地は皆無であった。なぜならメソポタミアでは存在の第一原因は神々にあって、地上もまた神々の世界であった。したがって人間存在それ自体さえ前提されなかったのである。世界は限りなく神々の世界であった³。

しかし夥しい神々の創造によって世界に秩序がもたらされる。創造によって世界に秩序がもたらされるとする思惟は広く西アジア、アナトリア、ギリシアの神話にも看取できる。これを伝えるメソポタミアの代表的文学のひとつはシュメール語による神話「エンキと世界秩序」⁴である。この神話はおおよそ467行からなり、要約すれば、大地の文化的営為は、エンキ

の活動によって組織化されたということである。全体は3部から構成る。冒頭エンキの讃美と自己讃美が詠われる(1行-160行)。

1. 天と地の偉大なる主, 自ら敬愛する者。
2. 父なるエンキは, 雄牛として子をもうけ, 大いなる野牛をもうせさせた,
3. 大いなる山エンリルによって配慮をうけ, アンの寵愛をうけた。
.....
61. アプス⁵の王エンキは自ら讃えた。栄光のうちに相応しく。
62. 天と地の王, わたしの父は,
63. わたしを荘厳のなかで天と地に現された。
64. 全地の主, わたしの長兄は,
65. 全ての me⁶ を集めて, わたしの手のなかに置いた。

これに続いて祭司らによる様々な儀式が執り行われる。

第2部はエンキの祝福である。巡行船⁷でシュメール⁸各地とその隣国を巡り, 各都市や国々を祝福する(161行-385行)。

191. エンキがその運命を定める。
192. “偉大なる地, 天と地の国, シュメールは,
193. 日の入りから日の出まで国民に me を分け与え, 厳かな輝きを身にまとう。
194. あなたの me は, 聳え立つ me, 誰の手もそれらに達しない。
195. あなたの心は念入りに働いて, 誰しもそれを推し量ることができない。
196. あなたの真の母体は, 神々が誕生するところ, 天のように触れることができない”。
.....
210. 彼はウルの神殿に出かける。

211. アプスーの王，エンキがその運命を定める。
212. “相応しい全てを所有する都市，水で浄められ，立つ雄牛，
213. ハシュル⁹の森，広大な影を持ち，力で満ち満ちている，
214. あなたの完璧な me が正しく導かれるように。
.....
219. 彼はメルツハ¹⁰の地に進んだ。
220. アプスーの王，エンキがその運命を定める。
221. 黒い地，あなたの木々が高い樹々であるように，あなたの森林が
高地のメス¹¹の樹々のようでありますように。
222. それから作られる玉座が王宮にありますように。
.....

きわめて隠喩的言語を用いてシュメールの地，ウルの都市を祝福する。森林に恵まれない地域であるゆえに，木材は貴重であった。それゆえメソポタミアの神話に森林はしばしば宇宙論的樹（聖樹）として登場する。オリエントでよく知られた木材の産地はパレスチナのレバノン山脈，シリアとアナトリアを分けるアマヌス山脈そしてイラン高原に連なるザグロス山脈である。古来メソポタミアはこれらの山脈から木材を調達してきた。オリエントに広く流布したギルガメシュ叙事詩を構成する主題のひとつに山の征服がある。ギルガメシュが戦いを挑む怪物フンババは山脈の原始の森に棲んでいたのである。樹々の恵みに浴することは大いなる祝福であった。222行以降メルツハはさらに葦，雄牛，金等によって祝福される。エンキはディルムン¹²の地にも赴き，その必用を充たす。

この部分は，エンキがチグリス河とユフラティスを命の水で満ち溢れさせ，神々に様々な管理を任せることで結ばれる。

250. 彼はその眼¹³をそこから取り出した後，
251. 父なるエンキはその眼をユフラティスに向けた後，
252. 戦いを挑み，後脚で立ち上がる雄牛のように立ち，

253. 彼の辜丸を持ち上げ、射精する。
254. そしてチグリスを溢れる水で満たす、
255. 牝牛が、草原で、蠍の蔓延る囲いで、子牛を鳴き寄せるように。
256. チグリスは後脚で立ち上がる雄牛のようにその傍らに立ち、
257. その辜丸を持ち上げ、彼は花嫁の贈り物を携える。
258. チグリスの心は良く肥えた野牛のように歓喜した。その誕生
[……]。
259. 水が湧き出し、溢れるほどの水があった。それは葡萄酒のように
甘美だった。
260. 穀物があらわれた。それは斑な大麦であった。人はそれを食べた。

エンキはチグリス河とユフラティス河がしっかりと機能するべく、エンピルル神を「運河の管理者」に任命する¹⁴。テキストが欠損しているため神名は判読しがたいが、エンキは河の魚の管理を彼に任じ、それから海に向かい、そこに神殿を建て女神ナンシェを置いて、それを管理させる。続いてエンキは命を与える雨を嵐の神イシュクルに委ねる。

さらにエンキはエンキムドゥに犁、頸木と馬/牛車¹⁵を、アシュナンには耕された畑に多様な穀類と野菜の責任を負わせる。クツラには鶴嘴とブロックの型を、ムシュダムには立派な家の建築を、そしてシャカンには野の家畜の世話を、牧神ドゥムジには草原と羊の管理をさせた。

エンキは都市に居住地もうけ、境界線を引き、裁判神ウトゥにその責任を負わせる。最後に彼は衣服の女神ウットゥに布織りの働きを任せた。

第3部はより大きな力 (me) を要求するイナンナと関連する。イナンナの野心と積極性がテーマになっていて、イナンナは他の女神たちと比較して自らの力が劣っているとエンキに不満をいう。つまりイナンナは他の女神たちのような十分な me や任務が与えられていないと不服を申し立てるところから始まる。

388. イナンナは父エンキの、

389. 神殿に入って、泣いて [……] 言った。
390. “アヌンナ神¹⁶、運命を定められる偉大な神々、
391. エンリルはあなたがたの手のなかに確かに預けました。
392. わたし、女性、あなたがたはどうしてわたしを異なって扱かわれたのですか。
393. わたし、聖なるイナンナ、わたしの任務はどこにありますか”。

他の女神たちは、エアから me を得るナンシェ¹⁷ を除けば、エンリルから相応の me を受け取る。エンリルの姉妹アルル¹⁸ (別名ニントゥ¹⁹) には‘産婆’の任務を、イナンナの姉妹ニニシンナ²⁰、ニンムグ²¹、ニサバ²² にはそれぞれ‘アの神殿娼婦’、‘銅細工人’、‘境界線管理書記’、‘漁場の管理者’の任務が与えられる。しかし、イナンナは自分だけが不相応の me しか得ていないと嘆く。エンキはイナンナの不平に応じて言う。

423. エンキは娘、聖なるイナンナに応える。
424. “わたしはおまえから何を減らしただろうか。
425. 娘よ、わたしはおまえから何を減らしただろうか。わたしはさらにおまえに何を加えようか。
……
429. おまえは衣服を、若き男の力強さを纏い、
430. おまえは少年の話すことばを定めた”。

加えて、エンキは何とかイナンナの憤懣を宥めようとする。彼は彼女が他の女神にもまして特権が与えられている（羊飼いの杖を含む数種類の杖）ことに言及する。またエンキは、彼女が戦争や衝突の神託において生気を与えることばも不吉なことばも語ることができ、糸を紡ぎ、衣服をこしらえ、破壊できないものを破壊する力と朽ちないものを根絶する力があるではないかと述べてイナンナを説得する²³。そしてこう言う。

445. おまえの称賛は見るに疲れて成長しない,

446. 娘イナンナよ, おまえは‘十分深く紐を締める’²⁴ (意味について)
を知らないのだ。

これに続くテキストは破損・欠損が大きいので判読はできないが、エンキの賛美で締めくくられていたと思われる。

いまやエンキは神々をとおして世界に me を分与し、秩序をもたらせた。確かにイナンナはエンキの秩序づけに不満を漏らす、これも神々の創造は、結局のところこの世の統治の投影であるとするメソポタミア特有の世界観からすれば、明らかであろう。いずれにせよ神々の世界も人間の社会と同様、不平・不満は絶えないのである。しかし、この作品の主題は現在する社会を直視することではなく、むしろ今を歴史以前の神々の世界に遡及させるところにある。まずエンキが me を神々に指示することで、世界に秩序が形成されることから始まる。

再び me に関連するテキスト「イナンナとエンキ」²⁵ を取り上げよう。これもいわゆるエンキ‘サイクル’と呼称される作品群のひとつで、2つの書板およそ400行からなる物語詩である。欠損部分もかなりあるが概略を把握するには十分である。「エンキと世界秩序」における最終章では me をめぐるイナンナのエンキに対する不満がテーマであった。このテーマの類似或いは発展として「イナンナとエンキ」が叙述するのは、イナンナが策略をめぐらしてエンキから me を獲得することにある。そこでウルクの女神イナンナは me を所有しアプスーに住むエンキを訪ねることを決心する。話の筋を追って見てみることにする。

第1の書板1欄

22. わたしがわが道をエリドゥのアプスーに向けて進んだとき,

23. わたしがわが道をエリドゥのアプスーのエンキに向けて進んだとき,

24. わたしはエリドゥのアプスーの彼をおだてて話そう。

25. わたしはエリドゥのアプスーのエンキをおだてて話そう。

エンキはイナンナが訪ねてくることを予感して、もてなしの準備をする。

11' 聖なるイナンナがまだエリドゥの神殿に向けて3キロメートルも
行かなかったとき、

12' アプスーの王、エンキ、この次第全てを知っていた者は、

13' 高官イスィムドゥに話して、彼の指示を与える。

14' “高官よ、ここに来て、わたしのことばを聴け。”

イナンナが到着するや彼らは着席し祝宴をもつ。

2 欄

20' イナンナはエリドゥのアプスーに入ると、

21' 彼女はバターケーキを食べる。

22' 彼らは（エンキとイスィムドゥ）イナンナの心を爽快にする冷たい水を注ぐ。

23' ライオンの前で、彼（エンキ）は彼女にビールを飲ませる。

24' 彼は彼女を友人のように満足させた。彼は彼女を同僚のようにもてなした。

ビールに続いてワインも振舞われる。酔いがまわってエンキは me をひとつずつイナンナに手渡す。イナンナはそれぞれを数える。

5 欄

14' エンキは高官イスィムドゥに言う。

15' “高官イスィムドゥよ、天のわたしの相応しい名！、

16' わが王エンキよ、わたしは快く信じて立とう！

17' me の 1-5 は、どこにあるのか。

18' わが王はそれらを彼(エンキ)の娘に与えられました。

19' meの6-10は、どこにあるのか。

20' わが王はそれらを彼(エンキ)の娘に与えられました。”

19行-20行の繰り返しがme 52まで続く。

第2の書板では、エンキがイシムドゥにmeについて尋ねると、イナンナはすでにmeを船に積荷してウルクに向け出航してしまったことから始まる。そしてエンキは、イシムドゥに悪鬼たちを帯同させ、meを積荷した船を奪還せよ、と指示する。

第2の書板1欄

1. 王子は彼の高官イシムドゥに言う。
2. エンキは高官イシムドゥに話す。
3. “高官イシムドゥよ、天のわたしの相応しい名！、
4. わが王エンキよ、わたしは快く信じて立とう！
5. 天の船は、どれほど遠くに行ってしまったのか。
6. 丁度いま……埠頭に着いたところです。
7. 行け。エンクム²⁶たちに天の船を取り戻せ。”

天の船は7つの埠頭を巡ってウルクに戻る途上にあった。イシムドゥとイナンナの会話が続く。イシムドゥはエンキの偉大なことばを破ってはならないと主張する。イナンナは答えて言う。エンキは彼女に(meを伴って)ウルク行きを許可されたのにどうして心を変えられたのかと。

20. 聖なるイナンナは高官イシムドゥに言う。
21. “なぜわが父はわたしに向かって彼のことばを変えたのだろうか。
22. なぜ彼はわたしに向かって彼の信頼できることばを覆すのだろうか。
23. なぜ彼はわたしに向かって偉大なことばを傷つけるのだろうか。

24. わが父は偽ってわたしに語ったのだ。さらに偽ってわたしに語ったのだ。
25. 偽って彼は彼の力の名とアプスーの名によって誓った。
26. 偽って彼は使者としておまえをわたしの後をつけて送った。”

エンクムたちはついにイナンナから船を捕らえようとするが、イナンナはニンシュブラに水に触れないよう指示する。そうすればエンキの水性怪物たち（エンクムたち）の魔術的力から逃れることができるからである²⁷。ここまでの1欄の叙述は埠頭を移動するたびに何度となく繰り返される。イナンナはとにかくウルクに向け旅を続けなければならない。テキストから明確な叙述を確認できないが、イナンナはニンシュブラの助けもあって、イナンナはウルクに到着して、meを降ろし、イナンナは祝宴を準備する。

4 欄

20. 彼女の高官ニンシュブラは、
21. イナンナに言う。
22. “わが女主人よ、今日、天の船をウルク・クツラブ²⁸の大いなる美わしの門に [あなたは運ぶでしょう。]
-
27. 聖なるイナンナは彼女に答える。
28. わたしは、今日、天の船を、
29. ウルク・クツラブの大いなる美わしの門に [わたしは運ぶでしょう。]
30. 街の至る所でわたしはそれを堂々と通させよう。
31. [me] を全て街中に堂々と行かせよう。”

ウルクの街は老若男女ともども天の船の巡行を祝う。王は犠牲の雄牛を屠り、椀にビールが注がれる。種々の太鼓の音が響き渡り、讚美が奏される。最後にイナンナが褒め称えられる。

物語は、イナンナが me を数える叙述へと展開する。5 欄から 6 欄の前半にかけて 110 の me がリストアップされる。me が個別に言及されるたびにイスムドゥは「あなたは奪い取った」と定型的に記述される。そして 6 欄の後半でイナンナが巡った 7 つの埠頭名が明記される。エリドゥからウルクへ向けた順路であろう。‘ガンジル²⁹の神殿は建てられる’、‘陶器片と金属片’、‘内は[……]で満ち満ちている’、‘船を埠頭に係留した’、‘白い埠頭’、‘[……]が出向された’、‘ラピスラズリの埠頭’と個々の埠頭名が上げられている。「天の船」の巡行はしばしば祭儀的巡行と関わっていた可能性がある³⁰。この物語の終わりは明確でないにしろ、エンキとイナンナは和解に至ったように思われる。

さて、神話的物語詩「イナンナとエンキ」を概観してきたが、われわれにとって重要な主題は、エンキのエリドゥ市からイナンナの都市ウルクに me が移譲されたこと、しかも一つ一つ個別に順を追ってそれが数えられることにある。歴史的背景としてエリドゥの都市文化がウルクに移譲されたことを示唆している。ウルクは次第に発展しシュメールの都市でも最も重要な都市国家となった³¹。神の規範であり、指示でもある文化を形成する目録 (me) がわれわれの観念や論理に照らして順不同で整理が不可能であったとしても、この物語の作者あるいは編集者にとって世界を秩序立てる意図があったことは自明である。ここで取り扱われている全ての me を枚挙し整理してみたい。グループ化することで作者の論理や概念を探る手立てとしたい。リストは「イナンナは～を持ってきた。」と定型的に叙述される³²。

グループ 1

1. en-機能 (霊的指導力)
2. lagar-祭司 (最初期の祭司)
3. 神性

グループ 2

4. 聳え立つ真実な王冠
5. 王権の玉座
6. 荘厳なしゃく
7. 杖と鼻綱
8. 荘厳な王服
9. 羊飼いの能力

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 10. 王権 | 43. お世辞 |
| グループ 3 | 44. テキスト欠損 |
| 11~15. 様々な祭司職 | グループ 12 |
| グループ 4 | 45. amalu 祭司職 |
| 16. 正義/真実 | 46. 聖なる宿泊所 |
| 17~18. テキスト欠損 | 47. 聖なる niggarr 神殿 |
| グループ 5 | 48. テキスト欠損 |
| 19. 冥界へ下ること | 49. アン (天空神) の神殿娼婦 |
| 20. 冥界から上ること | グループ 13 |
| グループ 6 | 50. 楽器 |
| 21~23. 異なる 3 人の祭司 | 51. 音楽 |
| グループ 7 | グループ 14 |
| 24. 黒い衣服 | 52. 長老的資質 (知恵) |
| 25. 多色の衣服 | 53. 英雄的資質 |
| 26. 首巻 | 54. 体力 |
| 27. 首…… | 55. 不正 |
| グループ 8 | 56. 公正 |
| 28~34. テキスト欠損 | 57. 都市の略奪 |
| グループ 9 | 58. 嘆きの準備 |
| 35. 軍旗 | 59. 幸福 |
| 36. えらび | 60. 背信 |
| グループ 10 | 61. 反抗的な国 |
| 37. 性交 | 62. 良いこと |
| 38. 接吻 | 63. 走り回ること |
| 39. 売春 | 64. 安全な住まい |
| 40. 体操? | グループ 15 |
| グループ 11 | 65. 木工職 |
| 41. お喋り | 66. 銅/銀細工人 |
| 42. 中傷 | 67. 書記職 |

- | | |
|------------------|--------------------|
| 68. 金属の鍛造 | 86. …… |
| 69. 皮革職人 | 87. 家族/一族の集まり |
| 70. フェルト職 | 88. 集会 (?) |
| 71. 建築士 | グループ 19 |
| 72. 葦職 | 89. 口論 |
| グループ 16 | 90. 勝利 |
| 73. 知性 | 91. 助言 |
| 74. 注意深さ | 92. 熟慮/和解 |
| グループ 17 | 93. 判決の言い渡し |
| 75. 聖なる浄め | 94. 託宣の決定 |
| 76. 給餌の囲い (?) | 95. …… |
| 77. おきの補給 (熱い石炭) | グループ 20 |
| 78. 羊の囲い | 96. 婦人の懇願 |
| 79. 災難 | 97. me を完成する…… |
| 80. 畏怖 | 98. 小さな…… |
| 81. 沈黙 | 99. 高い…… |
| 82. …… | グループ 21 |
| グループ 18 | 100~104. 5種類の太鼓 |
| 83. 点火 | グループ 22 |
| 84. 消火 | 105~110. 浄い天/アンの…… |
| 85. 重労働 | |

グループ1から22までの要点を手短に注釈し、検討することにする。

グループ1.

コスモスにおいて初めにもたらされた me は霊性、祭司、神性であった。なぜこれらの要素が秩序の初めに置かれたかは、メソポタミア社会が神々を前提条件として存在したことを考慮するならば理解できよう。

グループ2.

まさしく神々の世界の反映が人間の社会であるとすれば、王権が重視さ

れたことは明らかである。王権も神から下されたものなのである。王権に関わる me が列挙される。この中に羊飼いの能力が数え上げられていることには説明が必要である。たしかにメソポタミアの社会生活の生産基盤は家畜（主として羊と山羊）と農業（主として麦類）であったが、彼らの日常にとって最も重要な儀礼は動物犠牲にあった³³。支配者（王）が民衆を羊と見立て自らを羊飼いとす観念はメソポタミアでは古くから確立していた。

グループ 3.

神々を存在の第一原因としてきたメソポタミア文明における都市生活は神殿経済を基盤にして成立していた。したがって祭司がグループの上位に位置することは当然なことではあった。リストによれば Egizi-祭司, Nindingir-女性祭司, Išib-祭司, Lumah-祭司, Gudu-祭司が上げられている。さしずめ彼らは神殿官僚機構の管理職であった。職務の内容については十分わかっていない。注目すべきは女性祭司が含まれていることであろう。この作品はウル第3王朝時代（前2100年-前2004年）より以前に書かれた形跡がないことから、祭司職名のリストはこの時代の官僚体制を反映しているものと思われる

グループ 4.

16を除いてテキスト17~18は判読が困難なため、16の位置づけは把握し難いが、テキストは56（公正）に類似する。つまり16は正義、真実あるいは誠実を意味することから、王権や神殿機構において法による社会制度の確立が前提されていたことを窺わせる。実際メソポタミアにおける法典の歴史は古く初期王朝時代（前2350）にはウルカギナ王の改革碑文にも法の精神が記録されている³⁴。

グループ 5.

19と20はグループ6と関連するので、一まとまりの单元とも考えられる。「冥界へ下ること」は神々といえども許されない禁忌事項であった。メソポタミア文学は冥界をモチーフとする作品が多い。典型的作品は「イナナ-冥界下り」だが、冥界入国の代償は死であるし、冥界から上るには

代理のものを置かなければならなかった³⁵。この一団の祭司 Kurgarra-祭司, Giribadara-祭司, Sagursag-祭司たちはイナンナ/イシュタルの神殿に仕えていたものと思われる³⁶。この作品の主役はイナンナであること、そして冥界に関与するイナンナの作品を考慮すると、グループ5と6は一体と理解すべきであろう。

グループ7.

神殿経済を支えた祭司たちは祭服によって、職分に区別を設けていた。帽子や頭髪の形状によっても識別された。したがって、このグループもグループ5と6に密接に関係した一連の me と解されよう。

グループ8.

テキスト欠損につき判読不可である。

グループ9.

これらは戦闘の出陣などに関連する。イナンナは戦闘神の性格を持つことから高位にリストアップされたかもしれない。

グループ10.

イナンナは性愛の女神でもある。したがって、これらの me は豊饒を暗示させる。なおウルクのイナンナ/イシュタル神殿の近郊に居住し売春することは許されていた³⁷。

グループ11.

慎むべき言語行動のリスト。

グループ12.

amalu イナンナ/イシュタルに仕える祭司職と関係する³⁸。宿泊所 (ēš-dam は明らかにアッカド語の *aštammu* であり、グループ10と関連することは明らかである。つまり amalu 祭司職は神殿娼婦を意味し、彼女たちの出入りする神殿と宿泊所のことである³⁹。

グループ13.

楽器や音楽は、様々な公的祭儀、例えば新年祭の執行に欠かせなかった。残念ながら世俗の酒場歌や民衆の通過儀礼の祝祭は僅かにしか知られておらず、このコンテキストでの楽器や音楽も公的祭儀を前提としている。

グループ 14.

対をなす me の叙述が並ぶ。長老の資質は知恵に集約できる。英雄のそれは知恵に加え体力つまり若さが必要であることが求められる。公正と不正の順序が逆に配列されているように思えるが、不正を先取りすることでむしろ公正を際立てる文学的修辞法の適用とみなしてよい。法の支配が決定的なメソポタミア社会では公正さこそ揺ぎ無い me であった。続いて、都市の略奪や嘆きの準備が上げられている。幸福と背信、反抗的な国と心地よいこと (nam-du₁₀) 忙しなく旅の途上にあることと心置きなく住まいに留まることが列挙される。幸福の反意語は不幸ではない。神々に仕えることが人間存在の前提にされた人間にとって、幸福と背中合わせの me は神々に背くことであった。都市国家を形成していたメソポタミアでは安全な住まいに憩うことは限られていた。交易に携わる者にせよ、農耕・牧畜を生業にするにせよ人々は町の門を出ていったのである。

グループ 15.

明らかに当時の専門職・技術職のリストである。木工職人（大工）から葦職人まで上げられているが、彼らは都市の域内にいて生業に持つ者たちであった。書記のように高級官僚というべき me も見られる。

グループ 16.

シュメール語ではいずれも耳⁴⁰に関連する。実際、知性と訳した語は耳に派生する。メソポタミアでは知恵や知性、注意深さは「聞く」ことに起因すると考えられた。

グループ 17.

me 75 から 81 はおそらく一連の叙述に属すると思われる。聖なる浄めに始まり畏怖、沈黙に至るリストは牧羊の民にとって不可欠の me として数え上げられる。

グループ 18.

ここで明らかなのは取り扱われる me が対をなしていることである。点火と消火、重労働とテキスト欠損のため類推に過ぎないが軽労働ないし憩い、それに家族と集会である。都市生活者にとって基本的 me であって、前

述のグループ17と明白な対照を看取することができる。

グループ19.

メソポタミアの都市生活者には、近現代によって確立された法の下に置かれていたわけではないが、ハンムラビ法典に代表される判例と裁判がシュメール時代から存在していた。ここには全体的に法社会に関連すると見られる me が列挙される。対概念として口論にたいして勝利が、助言にたいして熟慮ないし和解が、さらに判決の言い渡しに対して託宣の決定が並置されている。

グループ20.

テキストの欠損が甚だしく意味不明である。

グループ21.

聖なる5種類の太鼓が上げられている。これらの種類の相違は太鼓の形状や材質によると思われるが⁴¹、詳細は不明な点が多い。音楽はメソポタミアの書記学校のカリキュラムの一部でもあり、太鼓の種類を上げさせるテキストがある。

グループ22.

「浄い天/アンの……」が6回繰り返される。宇宙の支配者アンの me を繰り返すことで、me の多様性と夥しさを表現している。こうした繰り返しもメソポタミア文学の修辞学的特徴として一般的に認められる。

以上「イナンナとエンキ」が上げる me についてグループ化を試みたが、先に述べたようにこれらの me を順序だてて整理し、論理的に説明することは困難といわなければならない。丁度ハンムラビの法典に例示されている282条がわれわれの論理からはその条項の順序について説明不可能であるのと同様である。もちろん当時の編集者なり著者が彼らの論理にしたがってリストアップした可能性まで排除するものではない。むしろ無秩序に枚挙されているというよりは、背後に彼らの世界観なり論理によって配置されてはいるが、今日のわれわれにはもはやそれらを把握できなくなっているといったほうが事実に近いといえよう。ここで重要なのは、me のリストが明らかにある種の区分と序列、秩序と組織といった概念によって枚

挙げられている、ということである。またこのリストは、神話的文脈においてではあるが、シュメール文化の儀礼や行政、法と社会、さらには抽象的概念までも表出していることは特筆すべきであろう。

いずれにせよ、古代メソポタミアにおいては世界秩序の確立の後に、神々の労役を担う人間の創造がなされる。

注

学術雑誌等略記記号は（１）*The Assyrian Dictionary of the University of Chicago, ed., Martha T. Roth, et. al. (Chicago, the Oriental Institute, 2005)*;（２）*W. von Soden's Akkadisches Handwörterbuch, (Otto Harrassovits, 1966-1981)*;（３）*R. Boger's Handbuch der Keilshriftliterature vol.1 (Berlin, 1967), 661-672.* に準拠する。

- 1 記号/は前方がシュメール語、後方はアッカド語を表す。
- 2 ウルクでは早くからイナンナが都市神として取って代わった。
- 3 古代メソポタミアでは一般的に宇宙と世界は明確な区別がなされない。本稿で「世界」ということばを使用する場合、宇宙論や宇宙開闢説を包摂している。
- 4 テキストの校訂と翻訳については C. A. Benito, *'Enki and Ninmah' and 'Enki and the World Order'* (University Microfilms International, Philadelphia, PA 1969). この他エンキ「サイクル」に属する作品に「エンキとニフルサグ」、「エンキとニンマハ」、「エンキのニップルへの旅」、「イナンナとエンキ」がある。
- 5 メソポタミア固有の概念。宇宙を構成する一部分で地階に属し、冥界の上部、大地の下に広がる真水を湛えたところ。エンキが神殿を構え住まう。
- 6 シュメール語。今までのところ適当な訳語がない。アッカド語では *parṣu* と翻訳されているが、その意味は「規則、規定」でシュメール語 *me* の語感を十分捉えているとはいいがたい。最近の翻訳においても *me* をそのまま使用し、それに注を施すのが一般的である。本稿でもこの慣習を踏襲した。Kramer は「divine force 神力」とし、Landsberger は「divine decree '神意」」、Jacobsen によれば「modus operandi '仕事の仕方」」、*norm* 「規範」などとしているが、基本に神的命令・指示を表しているのであろう。神々が所有するものとされ、イナンナは「全ての *me* の女王」と呼ばれる。「エンキと世界秩序」では *me*

の移譲が主題とされている。また「イナンナとエンキ」においては110にも及ぶ *me* が枚挙されている。このテキストと詳細な *me* についての検討は注25を参照。

- 7 magilum 船, 人や物を運搬する, 大小を問わない船。RLA Band 7 (1988), 192. ここでは神々の巡行に参列する船を意味する。
- 8 地名。範囲としてはニップルから南バビロニアの南部でいわゆるメソポタミア文化発祥の地である。
- 9 杉の木のような芳香を放す。山の名称としてもでてくる。CDA H 147. AHw 335.
- 10 地名。Meluhha は Magan, Dilmun とともに古くからメソポタミアと交易があったペルシア湾岸添えの都市。インダス地方と考えられている。Th. Jacobsen はエチオピア説を取る *Treasures of Darkness* (Yale University Press, 1976), 115.
- 11 主として家具の製作に用いられた。例えば, テーブル, 椅子, ベッド等。CAD M/II 34. AHw 647.
- 12 地名。注10参照。
- 13 セム語においては「眼」と「泉」は同一語である。
- 14 チグリス河ユウフラティス河の管理神であるが, バビロニアの神表 AN = *Anum* によればバビロンの天候神として現れる。Ea の息子とみなされる。
- 15 2頭以上の連畜。犁を牽いたり, 荷役を運ぶための家畜。ここでは犁を牽くための馬/牛車を意味する。
- 16 集合神。50の不特定神から構成される。古い伝承では7神, またエヌマ・エリシュ神話では60神からなる。イギギ神と類似する。
- 17 Nansh 文字記号は「家」と「魚」からなる。本来シュメールの南東に位置するラガシュの都市女神。水, 川, 運河とも関係する。またト占や夢の解き明かしに関与する。
- 18 Aruru 母神。Cf. ギルガメシュ叙事詩 第Iの書板2:33ではギルガメシュの好敵手であり, かつ友人となるエンキドゥを創造する母神である。
- 19 「誕生の女主人」の意。アッカド語の *Šassurum* 「子宮の女主人」で古拙期の母神にまで遡る。後にニンフルサグ (Ninhursag「山の女主人」添え名は「神々の母, 子供の母」) と同一視される。お産に関係して洪水物語などにもでてくる。
- 20 Ninsina 「イシンの女主人」イシン時代に特に崇拜された地方女神。アッカド語のテキストではイシュタルと同一視された。

- ²¹ Ninmug この女神については不明。
- ²² Nisaba 文字記号からして穀物女神である。書記の女主人としても言及される。
- ²³ イナンナ（イシュタル）は性愛女神であるが、彼女は初めから戦闘神の性格をもつ。この一見調和しない性格は複数の地方神の性格が混交した結果であろう。特にイシュタルは金星を意味し、明けの明星としての金星は男神であり、宵の明星としては女神であった。アッシリアとバビロニアは戦闘女神の特徴が強調された。イナンナ（イシュタル）はシリアを經由して最終的にはギリシアのヴィーナスに継承される。ただ戦闘神の性格はイナンナ（イシュタル）にのみ残されていった。シリアのアシュタルト、アシュタルテ或いはアスタルトまた聖書のアシュトレトと関係づけられる。
- ²⁴ たぶん格言的表現。エンキはイナンナが何も知ってはいない、むしろエンキの創造と、meの調和・秩序を乱していると論している。
- ²⁵ 校訂と翻訳については、G. Farber-Frügge, *Der Mythos "Inanna und Enki" unter besonderer Berücksichtigung der Lister der me. Studia Pohl* 10 (Rome 1973). この神話の解釈については B. Alster, 'On the Interpretation of the Sumerian Myth "Inanna and Enki"', *Ugarit Forschungen* 10, (1973), 15-27; S. N. Kramer, *The Sumerians* (The University of Chicago Press, 1963), 115-117, 160-162 を参照。
- ²⁶ Enkum は一義的には神殿の宝物を意味するが、ここでは神話的エンキの随行者を指すと思われる。第2の書板4欄後半にエリドゥの50の巨人、エングル（engur アプスーの別称）の50のlahama（エンキと関係する）怪物などが上げられている。これらの怪物たちは水から造られる被造物である。
- ²⁷ ギルガメシュ叙事詩 第10の書板 第2欄 27節以下には「死の水」への言及がある。ギルガメシュがウトゥナピシュティムを目指して航海しなければならない海の水のことである。
- ²⁸ Uruk-kullab はウルク市の一地域名。イナンナとドゥムジのエルシェマ賛歌などに出てくる
- ²⁹ Ganzir は冥界の大門である。「イナンナの冥界下り」89行参照。
- ³⁰ Cf. G. Buccellati, "The Descent of Inanna as a Ritual Journey to Kutha", *Syro-Mesopotamian Studies* 4/3 (Malibu, 1977).
- ³¹ メソポタミア全体の中でも傑出した文化、とりわけ祭儀や行政の中心となる。ウルク期（前4000年代）にエアンナ神殿域と一連の宗教的建造物があった。世界最古といわれる原初の楔形文字も体系化され、使用されていた。

- ³² テキストに欠損部分があり十分なグループ分けは困難であるが、古代メソポタミア、とりわけシュメール初期の文化・文明を検討する上で必要であると思われる。G. Farber-Frügge, *Der Mythos "Inanna und Enki" unter besonderer Berücksichtigung der Lister der Bofr.* 66-115. 参照。
- ³³ この重要性については文学のテーマとしてしばしば見られる。「ドゥムジとエンキムドゥ」つまり牧羊神ドゥムジと農耕神エンキムドゥをテーマとした対論文学（シュメール文学に特徴的である。アダミン・ドゥツガと呼ばれる形式）で、自分の方（ドゥムジ）が他者（エンキムドゥ）よりも優れていることを互いに主張し合うことで物語を展開する。例えば「夏と冬」、「木と葦」など。五味亨（訳）「ドゥムジとエンキムドゥ」杉勇編訳『古代オリエント集』筑摩世界文学大系（筑摩書房、1978）、43-48頁参照。キリスト教救済者においてイエスをよき羊飼いと表現するのも古代イスラエルから継承したこのメソポタミアの観念に起源している。
- ³⁴ メソポタミアの法制史は初期王朝時代に始まり以降、アッカド王朝やバビロニア王朝の終焉に至るまで続く。法制度はセム民族の社会の根幹を形成していた。ウルナンム法典（前22世紀）、リピットイシュタル法典（前20世紀）、エシュヌナ法典（前19世紀）、ハンムラビ法典（18世紀）などが知られている。旧約聖書のいわゆるモーセの十戒や律法もこのメソポタミアの法の精神を継承している。中田一郎（訳）『ハンムラビ「法典」』（リトン、1999年）；H. J. ベッカー 鈴木佳秀（訳）『古代オリエントの法と社会』（ヨルダン社、1989年）参照。
- ³⁵ 冥界をめぐる主題については拙稿「死に行く神の伝播とイスラエルの神」『人文論集』第15号（2000年）を参照。
- ³⁶ kur-gar-ra CAD K 558. AHW 510. kurugarrû CAD A II 341. AHW 75 assinnu 341. からイナンナ/イシュタル崇拝に関連して神殿で演技や音楽に関わった祭司たちであろう。S. N. Kramerはこの種の祭司たちが宦官であると翻訳しているが、この時代に確証にたるテキストは現存しない。S. N. Kramer, *The Sumerians*, 116. ただし、アッシリア時代になると宦官は重要な役割をもつ官僚となる。アッカド語の *ša rēši* 「頭の人、つまり長」を意味し、王の側近として仕えた官僚であるが、様々な地位を取ってテキストにでてくる。世俗の使用人の場合もある。
- ³⁷ A. L. Oppenheim, *Ancient Mesopotamia*, (The University of Chicago Press, 1977), 193.
- ³⁸ *amalitu* CAD A II 1. AHW 40.

³⁹ *aštamu* CAD A II 473. *AHw* 85.

⁴⁰ 「知性」の文字記号 *geštu₂* は原義である「耳」に基づく。「注意深さ」*giz-zal* は *geštu₂* との複合記号から構成される。

⁴¹ 太鼓の形状や材質については A. D. Kilmer et al., 'Musik' *RLA* 8 465-467. 参照。